

令和元年10月23日 幼児教育の実践の質向上に関する検討会 発表資料

国立教育政策研究所

幼児教育研究センターの研究・事業説明



国立教育政策研究所
教育政策・評価研究部長
(併) 幼児教育研究センター長 渡邊恵子





幼児教育研究センターについて

- ◆ 海外における幼児教育研究に対する関心の高まり
(OECD/ECECネットワーク「OECD保育白書」, Heckman「幼児教育の経済学」)
- ◆ 国内の幼児教育政策に関する議論の進展



エビデンスに基づく政策立案の必要性

文部科学省 幼児教育に関する調査研究拠点の整備に向けた検討会議報告書(平成28年3月)

幼児教育に関する国の調査研究拠点の整備が必要

平成28年4月国立教育政策研究所に幼児教育研究センターを設置





幼児教育研究センターに求められる役割と活動

幼児教育に関する調査研究

- ・プロジェクト研究(幼小接続, 幼児教育の質など)
- ・OECD国際幼児教育・保育従事者調査

国の調査研究拠点としての役割

～幼児教育に関する調査研究拠点の整備に向けた検討会議報告(平成28年3月)～

研究ネットワークの構築

大学
国際機関
地方自治体
(幼児教育センター等)
幼稚園・保育所・
認定こども園
関係省庁 など

研究成果の普及

シンポジウム
セミナー
Webサイト
など





幼児教育研究センターの体制(平成28年4月発足)

- センター長 渡邊 恵子
研究官 北崎 哲章
掘越 紀香 他4名
サポートスタッフ 2名
- 上席フェロー
無藤隆 白梅学園大学大学院
特任教授
秋田喜代美 東京大学大学院教育学研
究科長・教育学部長
神長美津子 國學院大學教授
- フェロー 5名
- 場所 中央合同庁舎第7号館 東館6階
(令和元年9月現在)





幼児教育研究センターの活動概要

1. プロジェクト研究

「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」(平成27～28年度)

「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究」(平成29～令和4年度)

2. OECD国際幼児教育・保育従事者調査の実施

3. Webサイトの充実などによる, 国内外の研究成果の普及

4. 研究ネットワークの構築





プロジェクト研究の報告書(平成29年3月)

～幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究(H27～28年度)～

第1部 幼小接続期の育ち・学びに関する研究

第1章 先行研究のレビュー

第2章 幼小接続期のカリキュラム

幼小接続期カリキュラム自治体調査の結果分析・実践事例のまとめ など

第3章 幼小接続期の育ち・学びを支える力を捉える手法の検討

「育ちと学びを支える力」を捉える質問紙調査(27年度に5園の年長児について園の担任と保護者へアンケート調査を実施。28年度は前年度の対象児が入学した小学校の1年生について学校の担任と保護者へアンケート調査を実施)の結果分析 など

第2部 幼児教育の質に関する研究

第1章 先行研究のレビュー

第2章 ECERS-3とSSTEWSの試行調査とその結果

海外の幼児教育の質の評価指標であるECERS3(保育環境評価スケール)とSSTEWS(保育プロセスの質評価スケール)を用いて、日本の幼児教育を試行的に評定した結果のまとめ など

第3章 海外の指標等

第4章 幼児教育の質評価スケールの考案に向けて





幼小接続期の「育ち・学びを支える力」を捉える手法の検討

「育ち・学びを支える力」を捉える質問紙調査

- ・27年度に5園の年長児について幼稚園の担任(10名)と保護者(264名)へアンケート調査を実施。
- ・28年度は前年度の対象児が入学した小学校10校の1年生について小学校の担任(27名)と保護者(808名)へアンケート調査を実施

- 社会情動的スキルを「育ち・学びを支える力」と名付けた。
- ①好奇心, ②自己主張, ③粘り強さ, ④自己調整, ⑤協同性の5因子を「育ち・学びを支える力」とし, 「学び・生活の力(①読み書き, ②言葉, ③数, ④分類, ⑤生活習慣)」との関係などを分析(共分散構造分析)。
- また, 幼稚園と小学校の2時点を縦断的に調査した結果を基に, 「育ち・学びを支える力」の5歳児から1年生への影響を分析(共分散構造分析)。



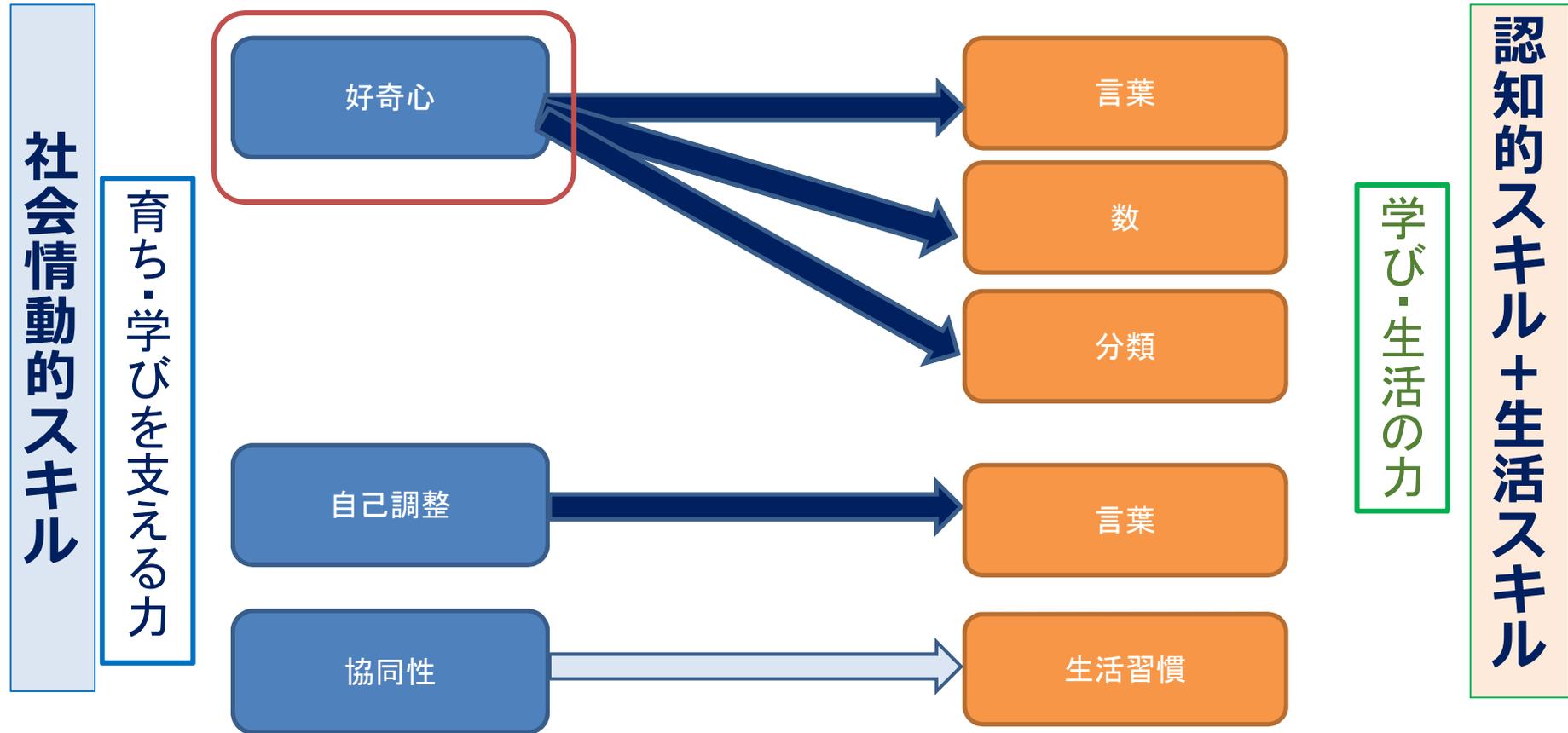


「育ち・学びを支える力」と「学び・生活の力」との関連

- 幼稚園保護者，小学校保護者，小学校教師のモデルでは，「好奇心」が「学び・生活の力（生活習慣を除く，読み書き，言葉，数，分類）」に影響しており，興味関心や試行錯誤，工夫，振り返りなどが，学びの基礎となっていることが伺われた。
- 小学校保護者と小学校教師のモデルでは，集中してあきらめずに挑戦し，最後まで取り組む「粘り強さ」が「学び・生活の力」に影響していた。

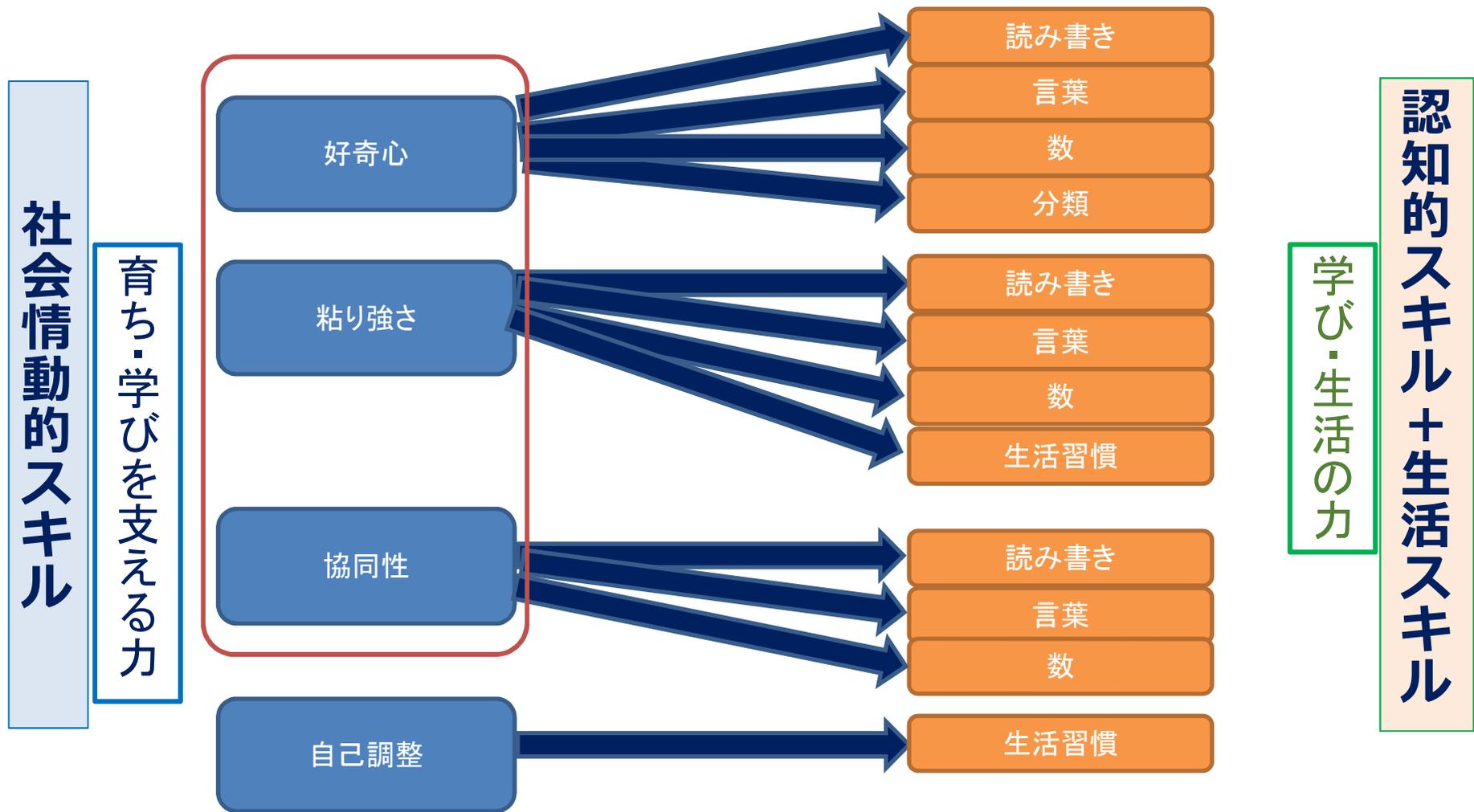


● 幼稚園・保護者アンケート



国立教育政策研究所・プロジェクト研究「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」（平27-28年度）より

●小学校・保護者アンケート



国立教育政策研究所・プロジェクト研究「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」（平27-28年度）より



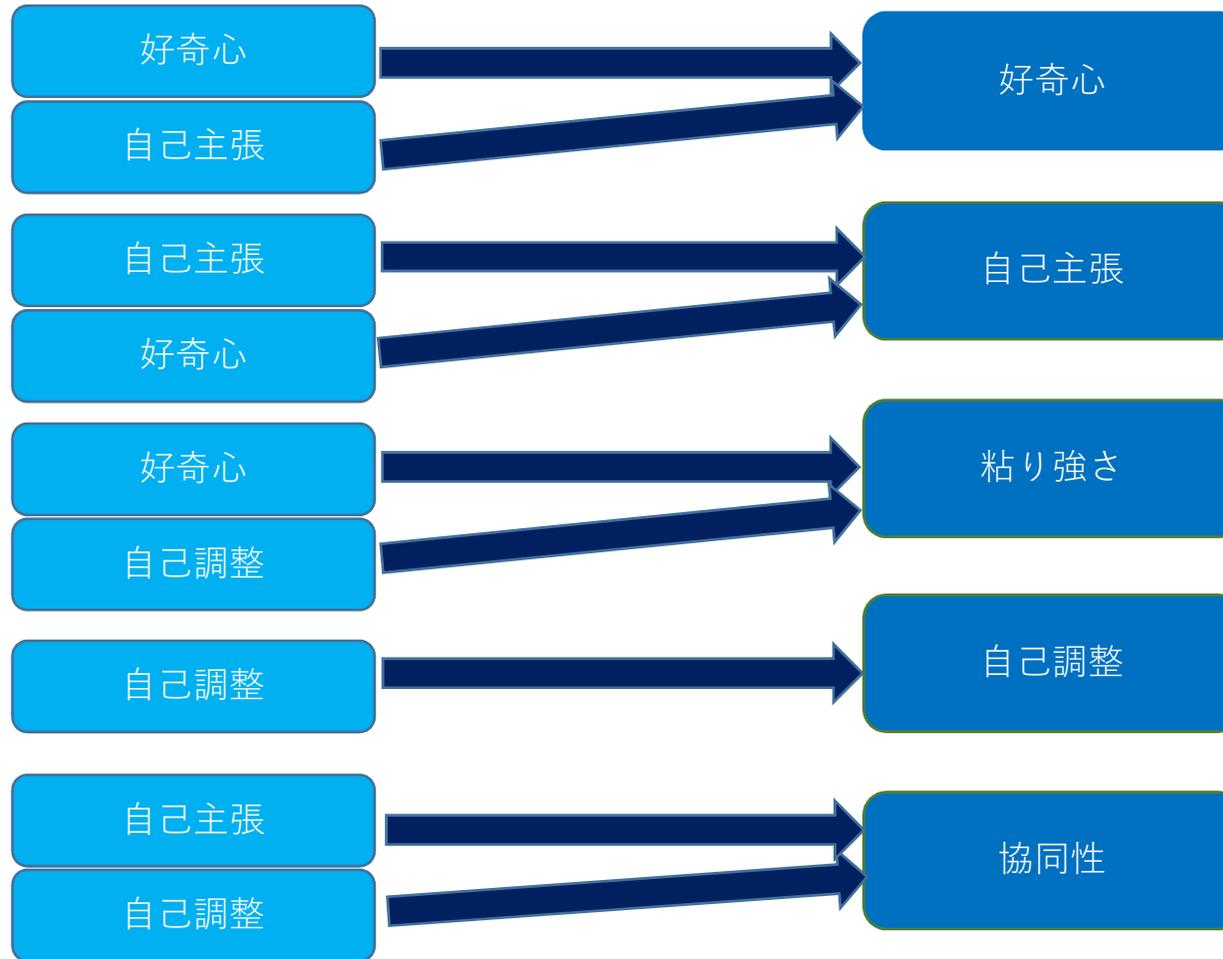
「育ち・学びを支える力」の5歳児から1年生への影響

- 幼稚園保育者，小学校教師のモデルでは，幼稚園の時の「好奇心」「自己主張」「自己調整」の高さは，小学校入学後のそれぞれの高さを予測するとともに，幼稚園の「好奇心」と「自己調整」が小学校の「粘り強さ」に，幼稚園の「自己主張」と「自己調整」が小学校の「協同性」に影響していた。



保育者教師評定：幼稚園→小学校（縦断）

幼稚園・5歳児
育ち・学びを支える力



小学校・1年生
育ち・学びを支える力

国立教育政策研究所・プロジェクト研究「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」（平27-28年度）より



幼児教育の質とは？

①構造 (Structure) の質

保育環境, 保育者の配置基準, 保育経験年数, 保育者の状態(メンタルヘルス等), 保育者の養成や研修システム, 職場環境やリーダーシップ, 保育期間, 保育時間など

②プロセス (Process:過程) の質

保育者との相互作用の在り方, 子供の仲間関係, 教材との関わり, 教育プログラムなど

③子供の育ちと学びの姿 (Outcome) の質

子供の言葉, 学力, 社会性の発達など





質の評価への関心の高まり

① ECERS (Early Childhood Environment Rating Scale)

アメリカで開発された、3歳以上の集団保育の質を測定する尺度。
1980年の初版発行以後、1998年と2015年に大きな改訂がなされ、
現行のECERS-3が2015年版。

アメリカ国内や英語圏の国々のみならず、翻訳されて各国で用いられている。



② SSTEWS (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being)

2015年にイギリスで刊行された、2歳から5歳の保育の質を測定する尺度。
特徴は、プロセスの質のうち特に保育者と子供の関わりに焦点を当てている
こと。



- ・上記2つは邦訳もされている。
- ・この他にも「質評価スケール」と言われるものが海外では多数開発されており、日本でも、自己評価チェックリストや評価ツールの開発が行われ始めている。
- ・質評価スケールの活用には意義が認められる一方で、慎重な検討が必要な点もあるため、日本の幼児教育の特徴を踏まえた質評価スケールの考案に向けてはさらなる検討が必要。





プロジェクト研究「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究(H29～R4年度)」の研究計画概要①

研究目的

- 研究の目的は、幼児期から児童期にかけて同じ幼児・児童を継続的に調査することにより、**幼児期から児童期への教育の意義や幼児期の教育・保育の質がその後の育ちと学びに与える影響などについて基礎的な知見を得ること。**
- 具体的には、**①幼児期からの育ちと学びを児童期まで継続的に調査することにより、育ち・学びを支える力を捉えることなどを指すとともに、②幼児教育におけるプロセスの質の評価とその活用の在り方について探究。**

研究メンバー

岩立京子(東京学芸大学), 埋橋玲子(同志社女子大学)等の幼児教育研究者や文部科学省職員, 国研研究官により構成。





プロジェクト研究「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究(H29～R4年度)」の研究計画概要②

研究概要

- 初年度(H29年度)は、地方自治体等の協力を得て、以下の調査を実施。
 - (1) 約90の幼稚園、保育所、認定こども園の協力を得て、3歳児(約2,500名)を対象とし、その保育者と保護者に対して質問紙調査等を実施。
 - (2) 若干の協力園においては、(1)に加え、3歳児を対象に認知的スキル及び社会情動的スキルに関する面接調査を実施するとともに、3歳児クラスを対象に幼児教育におけるプロセスの質評価を試行的に実施。
- 2年目(H30年度)は4歳児、3年目(今年度)は5歳児を対象に同様の調査を実施。小学校2年生まで継続的に調査を実施する予定。





関連するプロジェクト研究

「非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究」(H27～28)

- ◆ 生涯の各発達の時期(乳児期, 幼児期, 児童期, 青年期)における社会情緒的コンピテンスを挙げ, 研究での科学的測定や記述の手法を提示。
- ◆ また, 社会情緒的コンピテンスの発達の様相, 発達を支える有効な要因, 環境についての国内外の研究知見を収集・整理

「教育の効果に関する研究」(H27～29, 30～R2)の一環としての, 国内縦断調査(試行)

- ◆ 教育効果の測定に不可欠な縦断調査の実行可能性を検証
- ◆ 縦断調査の試行
- ◆ H28年度
 - 3歳になる幼児の保護者を対象にした質問紙調査(子供の発達状況, 家庭背景など)
- ◆ H29年度～令和元年度
 - H28年度の調査対象者(幼児の保護者)を追跡調査
幼稚園等を対象にした質問紙調査





OECD 国際幼児教育・保育従事者調査①

- OECDが、幼児教育・保育施設の保育者に関する国際調査を2018(平成30)年に初めて実施。
- 当センターが国内実施機関として、文部科学省、厚生労働省、内閣府の協力を得つつ、**全国の幼稚園・保育所・認定こども園**から216園を対象に調査を実施。
- 保育者の実践の内容や勤務環境、研修の状況などについて国際比較可能なデータを収集し、政策形成に寄与することを目指している。





OECD 国際幼児教育・保育従事者調査②

- **調査の目的**
幼児教育・保育の環境，特にプロセスの質に影響を与える要因について，
国際比較可能なデータを収集 → 各国の政策への示唆
- **参加国**
日本，ドイツ，ノルウェー，デンマーク，韓国など9か国
- **調査対象**
 - ・全国の国公私立の幼稚園・認可保育所・認定こども園から216園（無作為抽出）
 - ・抽出された園の長と保育者
- **調査手法**
質問紙調査（園への直接郵送・直接回収）
- **調査内容**
保育実践，保育者の信念，園の環境，勤務条件，職務満足度，
保育者の採用・養成・研修 など





OECD 国際幼児教育・保育従事者調査③

- **本調査の実施**

平成30年 10～11月 本調査を実施(216園)
国際比較可能な回収率を実現

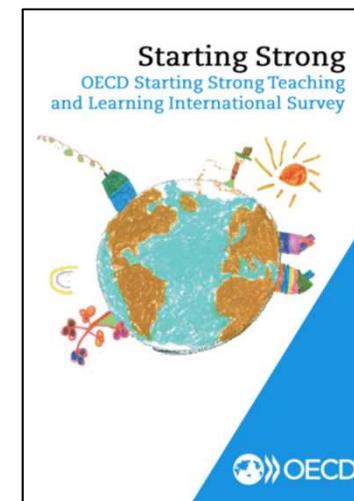
- **今後のスケジュール**

報告書は, 2回に分けて公表予定

主な内容は, ①保育者の子供への関わり,
②保育者の職能開発, ③園の環境など

- **シンポジウムの開催**

OECDや調査参加国の担当者を招聘するなどして,
シンポジウムを開催予定(令和2年2月20日)





Webサイトの充実

□ 幼児教育研究センターのWebサイト

http://www.nier.go.jp/youji_kyouiku_kenkyuu_center/y_index.html (和文)

http://www.nier.go.jp/English/youji_kyouiku_kenkyuu_center/y_index.html (英文)

□ 研究情報の集約と発信に活用

□ Webサイトへの掲載情報

・センターの取組の発信

→ プロジェクト研究, 公開シンポジウム, 国際調査

・研究情報

→ 国研報告書, 国立大学附属幼稚園紀要, 各自治体で作成した幼小接続カリキュラムなどへのリンク

・関係機関リンク

→ 内閣府, 厚生労働省, 文部科学省の幼児教育関連ページへのリンク





研究ネットワークの構築

- 大学等の研究機関，OECD等の国際機関，地方公共団体，幼稚園・保育所・認定こども園，幼児教育・保育関係団体，民間シンクタンク等との研究ネットワーク構築が重要

